哀しみのブレーメン

たいてい家でじっとしている生活だが、たまに家から這い出すと外の世界が物珍しく目新しく、会う人すべてが面白く楽しく、はしゃぎすぎてかならず失敗をする。失敗しかしない。友人と久しぶりに会えば興奮していらぬことまでぺらぺらしゃべって相手の話はこれっぽっちも聞かず酒をがぶ飲みして酔いつぶれる。街に行けば人の多さと物のきらびやかさと往来のにぎやかさに目がくらんで同じような色と形の服を何着も買いしかもぜんぶサイズが間違っている。仕事の打ち合わせをすれば日ごろの無沙汰や締切りの遅れなどを埋め合わせようとしてますます自分の首を絞めるような無理な約束をする。座談会では緊張と不安と準備不足のあまり白目になり口から泡をふき「あう、あう」としか言えない。花粉たちこめる街に服薬もマスクもなしに出ていってくしゃみを百連発するが、世の人は全員花粉症のはずなのに私以外誰も鼻を垂らしていない。チャージ不足で通せんぼされる。裏返しに着ていたことに一日じゅう気づかない。割り算を間違う。忘れたまま家を出る。受け取らずに帰ってくる。落とす。なくす。遅れる。迷う。気づかない。

そして結局ほうほうのていで帰ってきて部屋の片隅で手も足も出ず何もかもいやになって体育座りで頭をかかえる。

それでも人間とはしぶといもので、こんなふうでもやっぱり生きていたいと思う。なんとかしてなけなしの自尊心を保ち、先に進むよすがにしたい。そこで私は家の中を見まわして、「明らかに自分よりダメだ」と思えるものを探す。

まずあれだ。うちのニンニク絞(しぼ)り器。ニンニクを一かけ先端の箱状の部分に入れ、ペンチを握るようにぎゅっとグリップを握ると、箱の穴からペースト状になったニンニクが押し出される。前にラーメン店で見かけてずっと憧れていたのが、あるとき結婚式の引出物のカタログの中に入っていたので迷わず選択した。だが届いたそれは変に小じゃれたデザインでグリップの幅がひどく狭く、ぎゅっと握ると指に恐ろしく食い込む。最初の一個は歯を食いしばって絞りきったが、なぜこんな痛い思いをしてまでニンニクを絞らねばならないのかがわからず、二度と使っていない。ニンニクを絞るために生まれてきたのにニンニクを絞れない、こいつはたぶん私よりダメな気がする。

それとうちのヤカン。近所のホームセンターで三千円くらいで買ったホイッスル式のやつで、把手を持ってお湯を注ごうとして注ぎ口のフタを開けるとき、必ず四方に湯のしずくが飛び散って把手を持っている手にかかる。ものすごく熱い。どんなにそっとやっても

必ず飛び散る。把手を持つ前にフタを開けねばと思うがいつも忘れてしまい、だからよけいに憎くて仕方がない。お前も候補な。

ベランダに置いてある大きなジョウロ。把手が大きく輪になった素敵デザインと色に魅かれて買ったが、二、三回使ったら先端のシャワーヘッド部分がパカッと外れて水が「どわーっ」と溢れ出た。テープで補強してみても三度に一度は「どわーっ」となる。もう今は使っていない。お前もダメ認定。

部屋の片隅で体育座りで頭をかかえたまま目の前にニンニク絞り器、ヤカン、ジョウロを並べてみる。思うさま優越感に浸るはずが、なぜかわき上がるこの親近感。気分は犬、猿、キジをお供に連れた桃太郎だ。いや違うな。そもそも退治したい鬼などいないし、見れば見るほどこの役立たずな物たちと自分のあいだに上下関係などないと思えてくる。

ならばブレーメンの音楽隊でどうだろう。一人ひとりは非力だけれど、力を合わせれば強い相手を脅かすことも云々。次の打ち合わせには四人で参加しようか。ニンニク絞り器と、ヤカンと、ジョウロと、私と。